

英語の本、日本語の本

学術書出版プロセスの比較と私見

向山 直佑

東京大学未来ビジョン研究センター

自己紹介

- 向山直佑（むこやまなおすけ）
- 東京大学未来ビジョン研究センター 准教授
- 専門：政治学・国際関係論（天然資源の政治、国家形成、脱植民地化）

2021.3

2021-22

2022.9

2024.3

2025.1

オックスフォード大学で
博士号（国際関係論）

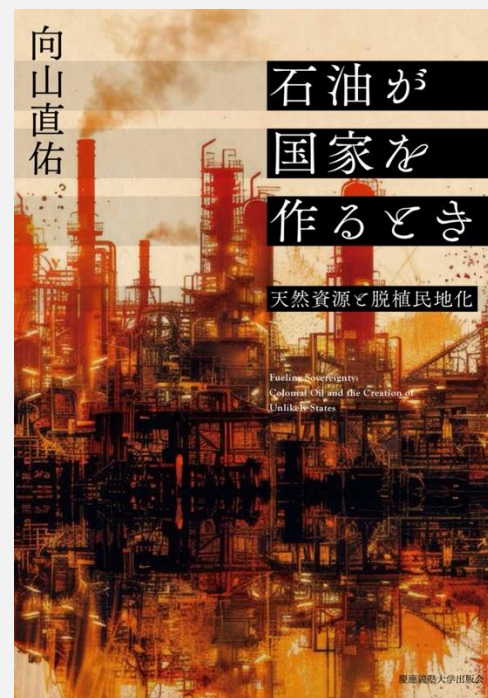
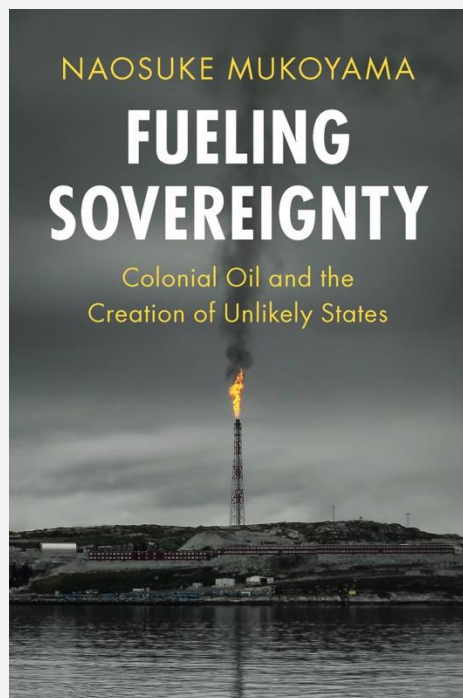
ケンブリッジ大学
ポスドク研究員

東京大学に着任

英語版著書を出版
（Cambridge UP）

日本語版著書を出版
（慶應義塾大学出版会）

本日の題材：3冊の本



同じ内容の学術書を、英語と日本語で約1年差で出版
→両プロセスを著者として比較できる、国内では比較的珍しい立場

『石油が国家を作るとき』

- 博士論文（Oxford, 2021）がベース
- 「本来存在しないはずの国家」はなぜ誕生したのか。植民地時代の石油は、なぜ、あるはずのない国家を生み出したのか。天然資源が国家形成に与える影響について、理論的かつ体系的な説明を与える。
- 目次
 1. 序章
 2. 単独独立の理論
 3. ボルネオ島における石油と脱植民地化
 4. ペルシャ湾岸における石油と脱植民地化
 5. 他地域における単独独立とその不在：クウェート、西インド諸島、南アラビア
 6. 天然資源の多様な影響
 7. 結論

『英語で本を出したくて』

- 東京大学出版会より7/24発売
- 『UP』の連載10章＋書き下ろし5章
- 英語・日本語での学術書出版のプロセスを、体験談を交えて比較



目次

英語編

1. デキそうなやつはだいたい友達
2. 競合他社、いてくれて感謝
3. エライ人を以てエライ人を制す
4. ヤルヤル詐欺師、独占手記
5. ランゲージライツをキープする
6. インドから来た手紙
7. 誰お前のちベストフレンド
8. 自己招待after自己推薦

日本語編

9. 「逆ナン」で本を出す
10. マスター、とりあえず学術書！
11. 衝撃に備えろ
12. 代打、オレ
13. 必殺仕事人、現る
14. わたし著者なんです
15. 本を出したら本を書く

本日の内容

1

英語で本を出す

プロポーザルから査読、契約、出版後まで（Fueling Sovereignty の場合）

2

日本語で本を出す

編集者からの打診、出版助成、翻訳、校正（『石油が国家を作るとき』の場合）

3

日英比較と私見

数字で見る比較／図書館・電子化・オープンアクセスをめぐって

1. 英語で本を出す

Fueling Sovereignty (Cambridge University Press, 2024) の場合

キャリアの関門としての学術書

- 自然科学系：本は業績とほぼ無関係、教科書程度
- 人文科学系：単著書籍が最重要業績。本を出さずに常勤教員になるのはほぼ不可能
- 社会科学系：両者の中間。本文化と論文文化。
 - 本文化：博士論文の書籍化（＝「博論本」）が最初の関門
 - 米国：博論本の出版がテニユア取得の要件
 - 英国：初職の採用で書籍の出版・契約が重視

出版までの道のり（英語版）：約3年

- 2021年～ ● **情報収集** — 博士号取得はゴールではなく次のレースのスタート地点だった
- 2021～22年 ● **プロポーザル執筆・編集者コンタクト** — 紹介を通じてCUPのシリーズ編集者へ
- 2022年夏 ● **全体原稿を提出 → 査読へ** — 初単著のため全章の提出を要求される
- 2023年1月 ● **査読結果（レポート10+ページ）** — 5～6ヶ月待った。平均的な期間
- 2023年2～4月 ● **レスポンス・レター → 出版契約** — 4月24日に契約。日本語翻訳権は著者に留保
- 2023年8月 ● **最終稿・索引・各種書類を提出** — その後は校正（外注）とカバー選定
- 2024年3月 ● **出版** — 当初予定の5月から前倒しに

英語圏のヒエラルキー

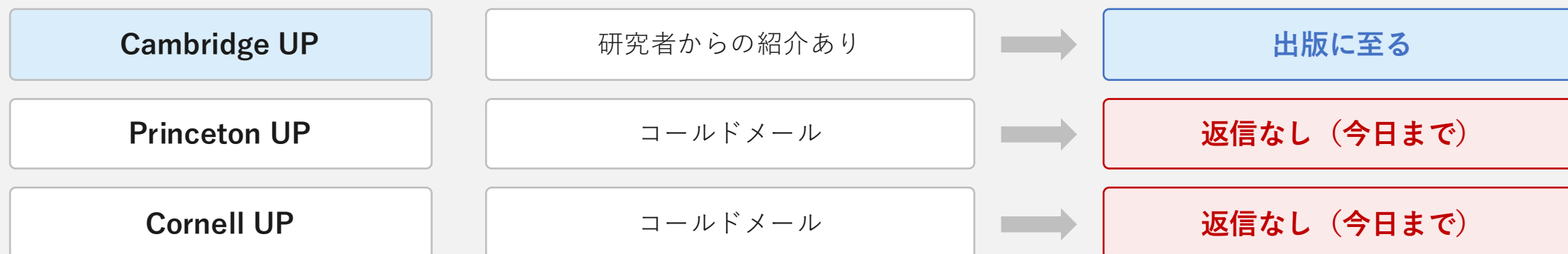
- 「どこから出したか」が本の質のシグナルになる
 - ジャーナル・大学ランキングと同じ発想
- 大学出版社 > 商業出版社という評価差（日本にはほぼない区別）
 - まず大学出版、ダメなら商業出版社へ、が定番のアドバイス
 - 商業出版の方が迅速で、編著本なども受け入れてくれる傾向あり
- 若手はこぞってトップ出版社に殺到
→ 競争は熾烈



※政治学・国際関係論の場合のイメージ
(分野・テーマによる大きな違いがある)

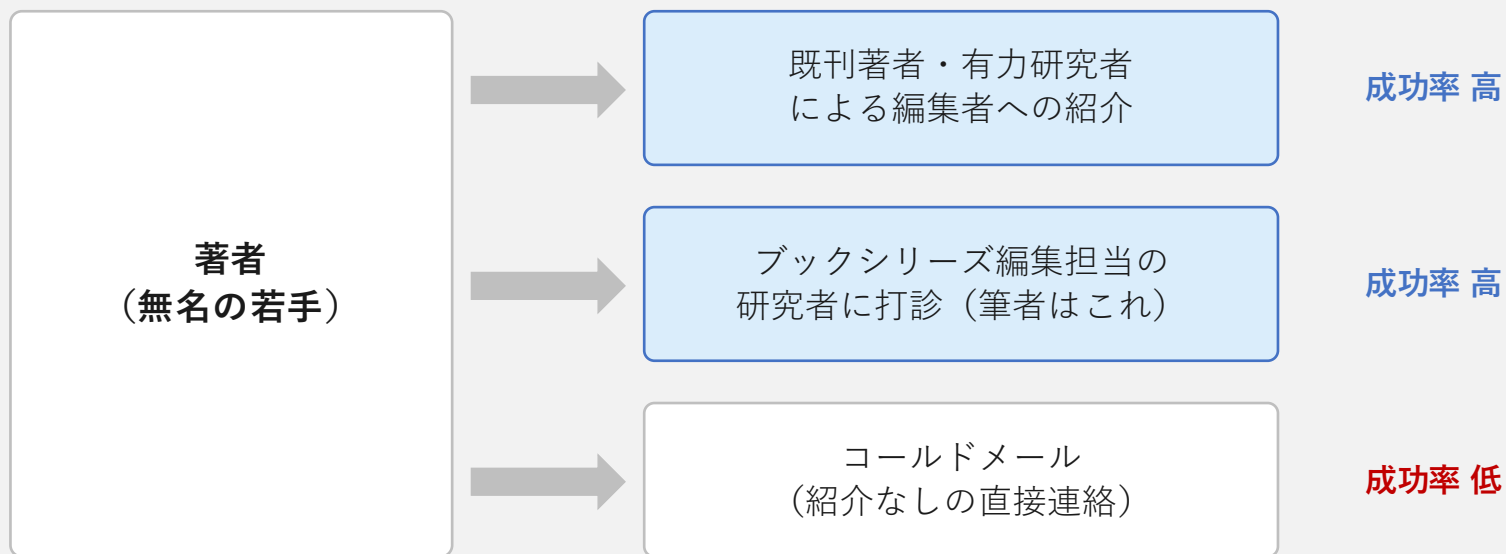
最大の関門：編集者の返信

- トップ出版社ほど事実上「一見さんお断り」 — 世界中の研究者が殺到し、メールボックスは常に満杯
- 「デスク・リジェクト」率は非常に高い。ポジティブな返事をもらった時点で既に例外的な成功。



→ 紹介1打数1安打、コールドメール2打数0安打。「持つべきものは人脈」を痛感

アプローチの方法



- 紹介者は「大物」で「最近も出版している人」ほど効果的
 - 留学・就職の推薦状と同じ構造
- 日本で博士号を取ると、このネットワークの内側に入りにくい
 - 英語出版を阻む一因
- フェアとはいえないが、それが現実。現実に合わせて戦略を！

複数出版社への同時アプローチはOK（英語圏）



- コネがない場合は特に、同時アプローチが普通（競争が激しいため）
- ただし透明性が必須：プロポーザルに明記
- 原稿提出・査読・・・と進む過程で、1社に絞り込む。

学術書の査読

	学術論文	学術書
ブラインド方式	多くはダブル・ブラインド	シングル・ブラインド
査読者の選定	著者の関与は限定的	著者が候補を提案できる場合あり
提出する原稿	論文全体	全章またはサンプル章（著者の「信用度」次第）
対価	無償ボランティア	一定の対価が支払われる

- 「英語圏の出版はフェア」は買いかぶり。実際は戦略がモノを言う世界

査読の質と時間

査読期間の目安

学術論文  2～3ヶ月

書籍（筆者）  5～6ヶ月

書籍（遅い例）  1年以上

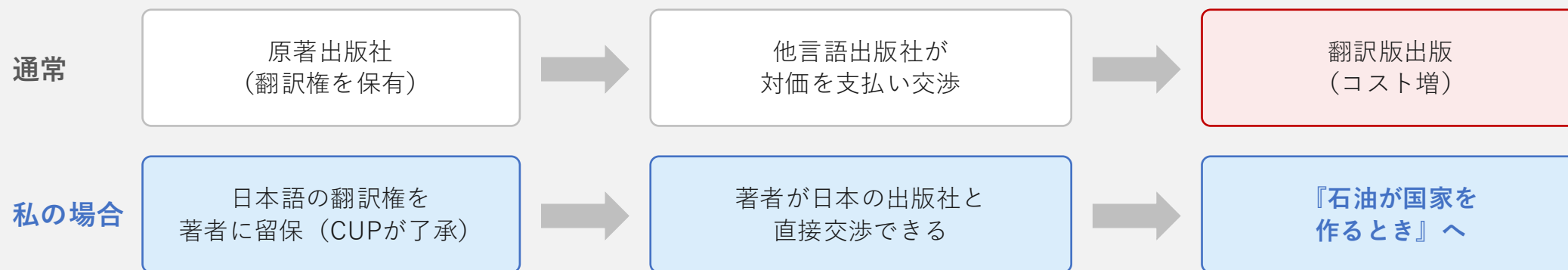
- 初単著の若手にとって、1年待たされて落とされたら就職に直結する死活問題
- 届いた査読レポートはシングルスペースで12ページ
- これまでで最も建設的で役立つフィードバック（個人的体験）
- 質が高い理由（周囲の仮説）：対価が支払われる／依頼が名誉／査読者が後で判明する評判コスト

契約条件

- 最初の本に交渉の余地はほぼない
- 私の契約条件（CUP）
 - ハードカバー／ペーパーバック／電子版を同時発売
 - 印税：日本の一般的な印税と同程度
 - 著者部数：HB 6部＋PB 6部
- 著者部数12部は日本の感覚よりかなり少ない — 「献本」文化の範囲の違い
- 契約書は電子サインで完結

翻訳権を著者に残す

- 通常、出版社が全言語の翻訳権を保有 → 他言語版は出版社間の交渉 + 対価の支払いが必要に
- 自分で他言語版を出す当てがあるなら、その言語の権利を著者に残すよう交渉できる



助成なしでは学術書を出しにくい日本の状況では、翻訳権費用の上乗せは致命的 → 留保が極めて重要

制作段階

カバー（装丁）

- ・「Getty Imagesから候補を選んでください」
- ・専属デザイナーが一から作る想定は幻想だった
- ・避けたかった油田写真が結局採用される
- ・ **自己評価：10点満点中6点**

校正

- ・完全に電子化。作業はインドの専門会社に外注
- ・タイポ・文法など最低限のみ。内容には踏み込まない
- ・「本当にこれでいいのかな？」のまま進行
- ・ **日本語版の校正でミス発覚**

- 小規模社は差別化も：Stanford UP は一冊ごとにデザイナーを立てる「ビスポーク装丁」が売りとのこと
- 大手は出版点数が多く、一冊あたりの労力は小さくなりがち — プレスページと手厚さは別物

印税と部数のリアル

販売部数

印税総額

図書館経由等の
ダウンロード数

- 「世界言語」の英語で書かれ世界中で買えるはずの本が、日本以下の部数しか売れていない。
- 周囲によれば、10年20年経っても数百～1,000部程度が標準とのこと
- 読まれてはいる（DL）が、売れていない。そしてDL分は印税明細に未反映？

なぜ売れないのか

① 学術書が書店にない

英米では大型書店にも学術書はほぼ置かれない。買うならネットか出版社直販のみ。拙著を店頭で見たのはCUP直営書店の1軒だけ。

② 学術書と一般書の分離

新書・選書のような中間媒体がなく、書き手も別。研究者は学術書だけを書き、一般書は作家・ライターが書く。

③ 図書館の包括契約・電子化

元来最大の買い手だった図書館が、一冊ずつ買う形から出版社との包括契約＋電子DLへ移行。刷る部数も売れる部数も減る。

2. 日本語で本を出す

『石油が国家を作るとき』（慶應義塾大学出版会, 2025）の場合

「逆ナン」の衝撃

- 2022年11月、慶應義塾大学出版会の編集者から突然のメール — 既刊論文を読み込んだ上での打診
- 編集者から連絡が来る：英語圏の感覚ではありえない
- 企画自体が編集者の提案で始まることすらある。日本の著者は大切に扱われている？
- 企画書は短くてOK（⇔英語圏の10ページ超のプロポーザル）

ヒエラルキーの不在

- 各社の「カラー」や分野ごとの評判はあるが、「どこがトップか」という序列は共有されていない
- 大学出版社と商業出版社の評価差もほぼない — 商業出版社の研究書も同等の業績
- 出身大学の出版会から出す義務のような縛りも（少なくとも筆者の観測範囲では）ない

出版までの道のり（日本語版）：約2年

- 2022年11月 ● 慶應義塾大学出版会から打診 — 英語版はまだ査読中。英語版契約後に企画始動
- 2023年1～2月 ● 企画書を提出（約2ページ） — 編集会議へ
- 2023年前半 ● 翻訳作業（自分で＋機械翻訳の下訳） — 夏の助成応募に完成原稿が必要
- 2023年夏 ● 科研費・出版助成に応募 — 研究成果公開促進費「学術図書」（締切は例年9月頃）
- 2024年初頭 ● 採択 → 年度内出版が確定 — タイトルも応募時に確定（採択後は変更不可）
- 2024年9～12月 ● 完成原稿提出 → 校正（紙のゲラ） — 熟練校正者の大量の赤字と格闘
- 2025年1月27日 ● 出版 → 2月上旬に重版決定 — 初版1,000部＋重版800部

日本特有の関門：出版助成

- 学術書は売れず採算が合わない → 国・民間の助成で出版社の負担を軽減し、価格も抑える仕組み
 - 代表格：科研費「研究成果公開促進費（学術図書）」 毎年9月頃締切、採択されたら翌年度内に出版
- 応募には完成原稿が必要 — 出版前年の夏に、原稿が出来上がっていないなければならない。
- 衝撃：科研費の出版助成を受けると、著者は印税を一切受け取れない
 - 公的資金による出版から著者が利益を得るのは不可、という理屈。
 - 対価の道が端から閉ざされていることは、著者のやる気を削ぐのでは

制作段階

カバー（装丁）

- 編集者から写真候補
→デザイナーから装丁案→著者が選ぶ
- 自己評価：10点満点中8点

校正

- ゲラは紙で到着（分厚い封筒＋レターパック返送）
- 大量の赤字：表現だけでなく内容の矛盾等まで精査
- 英語版のミスが多く発覚

街の本屋に自分の本がある、ということ

- 重版決定：英語版の実売をはるかに上回る
- 紀伊國屋・丸善・東京堂などの大型店から、地方のロードサイド中型店まで店頭に並ぶ
- 出版社のnote・X・Instagramでの販促も熱心（CUPは通り一遍のポストのみだった）
- 書評の効果：日経（3月）→ 朝日（4月）→ 産経、年末には読売「2025年の三冊」にも
 - 書評が出ると書店の「書評コーナー」＝人通りの多い大通りに移動できる。

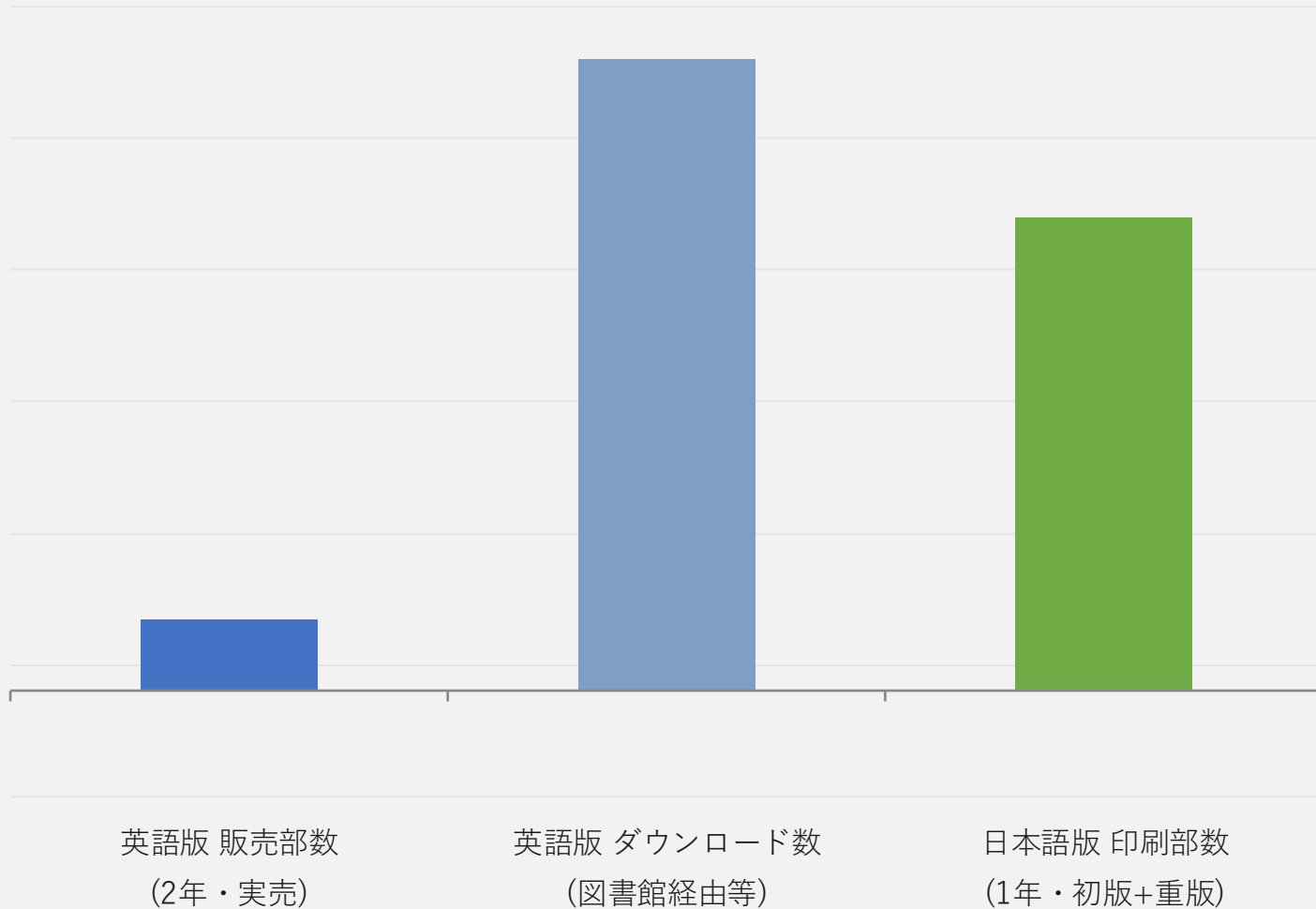
3. 日英比較と私見

図書館・電子化・オープンアクセスをめぐって

日英の学術書出版プロセス

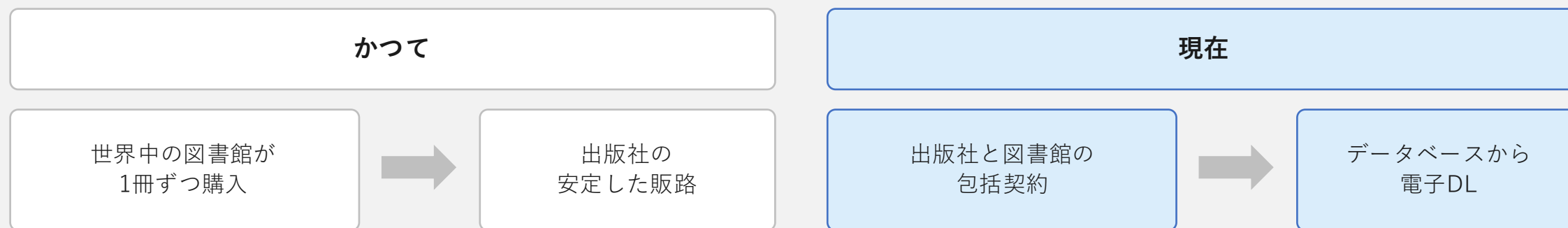
	英語圏	日本
出版社の構造	少数トップの「山」／大学出版社＞商業	序列なき「台地」／大学・商業の差なし
プロセスの起点	著者からの売り込み（複数社同時可）	編集者からの打診も普通（1社と交渉）
企画書類	プロポーザル約10ページが命	企画書数ページ程度でも可
査読	研究者2～3名が正式査読（数ヶ月～1年）	公式の査読は基本なし
契約	契約書に署名してから開始	口約束で進むことも多い
校正・装丁	最低限・外注・コストカット	綿密・丁寧・編集者と二人三脚
書店流通	一般書店に学術書はほぼない	街の書店にも学術書が並ぶ
費用と対価	助成不要／印税5～10%（大学出版社）	助成が前提になりがち／科研助成なら印税ゼロ

英語で書けば読者が多い、は本当か？



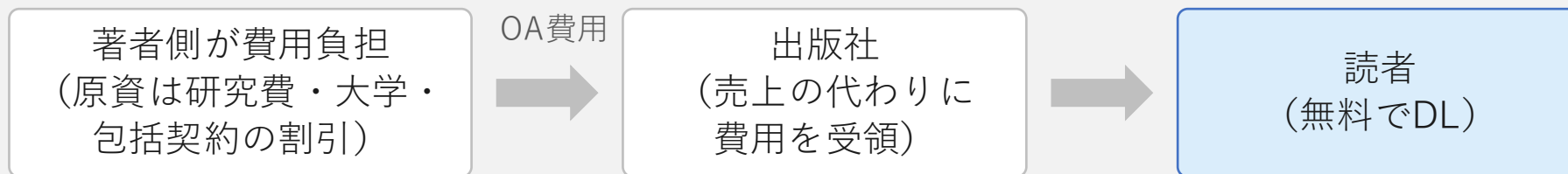
- 「読んだ人」の数は日英で同程度か（英語版はDL中心）
- 潜在読者数を考えれば英語版は何倍も売れておかしくない
- 包括契約への移行で著者の取り分は事実上目減りしている？

図書館と学術書：英語圏の現状



- 図書館側：選書の手間とスペースを節約／出版社側：一冊ごとの販促・印刷が不要に。
- 一方で著者側：紙が売れず、DLは印税に反映されない。
- 日本では（まだ）書店文化が学術書を支えている。ただ、日本語で本を読む人口は今後減っていく見通し。

オープンアクセスと言う前に…



- 読者は無料で読め、DL数は激増。著者・出版社の懐も痛まない：一見バラ色だが、本当に良いことか？
 - 懸念① 大学・財団・国の負担増：本来は研究や雇用に向かうはずの資金を食う「コスト転嫁」
 - 懸念② 「専門知はタダ」が当たり前になれば、書籍の売上減・出版社の存在意義低下も
- 結局これは「学術書のジャーナル論文化」：APC・購読料をめぐる問題が書籍にも伝染しつつある。
- OAを推す前に、売る努力・届ける努力（本作り・装丁・書店・海外販促）する余地があるのでは？

まとめ：それぞれの強みと課題

■ 英語圏

- + システムが明快（誰に何を出すか明確）
- + 査読による質保証と正式な契約
- + 世界中の研究者に届く可能性
- 熾烈な競争と長い査読のストレス
- 校正・装丁は最低限
- 一般書店に並ばず、驚くほど売れない

■ 日本

- + 選択肢が多く競争ストレスが少ない
- + 編集者と二人三脚、校正・装丁が丁寧
- + 街の書店に並び、一般読者にも届く
- 契約なしで進む不透明さ
- 助成依存と「印税ゼロ」の禁欲
- 市場の先細りリスク、海外展開の難しさ

何もかも良い国は存在しない。ただ、日本の学術出版の方がずいぶん健全に見える部分も、意外にたくさんある。

ご清聴ありがとうございました。